

ご機嫌よう、傾国の悪女です

く私を殺した人たちへ、謝っても許しませんからく



ジェラルド

第二王子。

精鋭揃いの第一騎士団の団長。

民のことを考えず、

自己保身に走る貴族たちを嫌い、

前王の死に疑問を持っている。

ヴェロニカ

両親に冷遇された公爵令嬢。

婚約後はロードリックと

セリーナに陥れられ、

最終的に「傾国の悪女」として

処刑されてしまう。

ノーラ

商売によって急成長した

ゴルディア伯爵家の令嬢。

ヴェロニカの学園時代の同級生。

エルヴァノート公爵

ヴェロニカの父。

娘を愛さず、権力を失うことを

何より恐れている。

セリーナ

平民出身の侍女。

ロードリックの恋人。

ヴェロニカのことを

見下している。

ベン

新聞記者として

優れた能力を持つ。

元第一騎士団の騎士。

ロードリック

セリーナのことを愛する、

傲慢な性格の第一王子。

自分よりも有能な

ヴェロニカを

疎ましく思っている。

CHARACTERS

プロローグ

——コッソ、コッソ。

私——ヴェロニカは、処刑台へと続く階段を一段ずつ上っていた。

「これより、ヴェロニカ・エルヴァノートの処刑を執り行う」

処刑台に立つと、聖職者の衣装に身を包んだ大臣がそう告げた。

高みから見下ろすと、足元には群衆がひしめいていた。

この中には、私の顔を初めて見た者も多いだろう。なのに、誰もが今か今かと私が死ぬ瞬間を心待ちにしている。好奇の混じった視線を向けられると、恐怖で体が震えた。

「ヴェロニカ・エルヴァノート、あなたは王妃でありながら敵国——オルディア帝国のスパイとして、国を混乱させた『傾国の悪女』だ。反論の余地はない」

すべて嘘だ。私はオルディア帝国のスパイじゃない。

傾国の悪女だと言われる理由もなかった。

だけど、どれだけ反論しても、誰も私の話に耳を傾けてくれない。

「ロードリック陛下、罪人ヴェロニカにお言葉を」

「うむ」

ロードリック——この国の王であり、私の夫でもある人。

艶のある金髪。整った顔立ちは彫刻のように冷たく、私を見る目には情が一切ない。その顔には私への嫌悪だけが浮かんでいた。

その隣には侍女のセリーナの姿もある。

淡い桃色の髪をゆるく結び、可憐な見た目だけなら無害な侍女そのものだ。

だけど、口元に貼り付いた微笑みはどこか邪悪で、その視線は毒のように恐ろしかった。

ふたりの顔を見ると、今まで感じていた恐怖が嘘のように消え失せ、代わりに憎しみの炎が一層激しく燃え盛る。

せめてもの抵抗を、とふたりを睨みつけるが、ロードリックは鼻で笑い、吐き捨てるように言う。

「ヴェロニカ、まさか貴様が帝国と通じていたなんてな。僕をあざむくとは、いい度胸だ」

「あなたがここまでひどい人だとは思っていませんでした。わたし、あなたが怖いです」

セリーナは怯えた表情を浮かべる。

「違います。私は——」

「まだ反論するか！」

私の声に被^かせるように、ロードリックが一喝した。

ロードリックはセリーナと共に私に背を向け、冷酷に告げる。

「殺せ。これ以上、こいつの顔を見たくない」

「ロードリック様！ ロードリック様！」

何度も名前を叫ぶ。

だが、ロードリックたちの歩みは止まらない。セリーナは少しだけ振り返って、私に小さく舌を出した。

——許さない。

今すぐにでもふたりに飛びかかって、喉^{のど}を掻^かつ切つてやりたい。だが、騎士たちが立ち塞がり、それは叶わない。

ふたりが処刑台から下り、断頭台に私の首が据えられる。

なんとか逃げ出そうともがくが、私の細腕では断頭台をわずかに揺らすことしかできなかった。無情にもギロチンの刃^{やいば}が下るされ——

私の人生は幕を閉じた。



——闇の中をさまよっている。

私の傍^{かたわら}らをさまざまな映像が通り過ぎていった。

『ロードリック様、あの女が死んで、せいせいしましたね！』

『まったく。くくく……あいつめ、最後までみじめに許しを乞うていたな。傑作だった』

ロードリックとセリーナのふたりが、死んだ私を罵る。^{ののし}
私、何を見せられているの？

混乱の最中、次の映像が流れる。

『き、聞いてないぞ！ どうして、そんなことになる！』

ロードリックが悲痛な叫びを上げている。彼の首には見慣れない奇妙な紋章のネックレスがかけられていた。

その前にいるのは、セリーナとは違う女性。その女性の顔は闇で覆われ、誰だかわからない。詰め寄るロードリックに、正体不明の女性は告げる。

『ライナルト王国は生まれ変わるのです。ライナルト領としてね』

領……？ どういうこと？ 私のいるライナルト王国はひとつの国。決して領ではなかった。その映像が消えると、突如視界が光で覆われ――

視界が開ける。

そこは何度も見たことがある、ロードリックの私室であった。

「え、私……」

首に右手を当てる。

……うん、ちゃんと付いている。

先ほど、間違いなくギロチンで首を刎^はねられたはずだ。なのに、私の身体は何事もなく繋がって

いる。

「まさか、夢だったってこと？ 夢にしては、あまりに生々しかったような……」

「うるさいな、君は」

声が聞こえた。

反射的に声のするほうへ顔を向けると、そこには忌々^{いまいま}しげな表情を浮かべるロードリックの姿があった。上半身裸の状態で、いつもきっちり整えられた髪も若干乱れている。

「いきなり訳のわからないことを言つて……君は僕を、まだイラだたせるつもりなのか？」

「申し訳ございません」

ひとまず謝る。

……よくよく自分の姿を観察すると、私も裸だわ……なんで？

時刻は夜。月明かりだけが、ほんのりと室内を照らす。これは……

「貴様を抱くなど、吐き気がする」

考えていると、ロードリックは嫌そうに吐き捨てる。

「だが、これも世継ぎを産むためだ。調子に乗るなよ？ 貴様は所詮、お飾りの王妃。僕から愛さ

れているなどと、勘違いするな」

――『貴様を抱くなど、吐き気がする』

そうだ、間違いない。忘れるはずがない。

これはロードリックとの初夜、営みを終えた後に彼が放った言葉だ。

私とロードリックは政略結婚だ。そこに愛はない。

それでもロードリックに抱かれているときは、もしかしたらほんの少しくらい彼は私に愛情を感じてくれるのではと期待した。

だが、それは私の勘違い。

ロードリックに突き放され、私は失意の底に沈んだのだった。

えーっと、もしかして……

そのとき。

まるで走馬灯のように、頭の中で今までの記憶が流れた。

第一話 虐げられた令嬢が、傾国の悪女と呼ばれるまで

すべての始まりはおよそ十ヶ月前まで遡る。

「ヴェロニカ、午後の仕事はちゃんと終わったの？」

お母様がやって来て、私にそう尋ねた。

「いえ、午前中は洗濯物と掃除で潰れてしまいましたから、終わっていませんわ」

「まだ終わってないの？ あんたはほんと無能ね」

お母様は扇子で口元を隠し、ゴミを見るような目で私を見る。

「すみません」

「ふん……っ。怒られているのに、あんたはあいかわらず表情ひとつ変えないのね。涙のひとつでも流したら、ちよつとは可愛げが出るかもよ」

お母様は扇子をぱちんと閉じると、私を鼻で笑う。

「まあいいわ。さつさとやりなさい。あつ、洗い物が終わったら、次はディナーの準備。少しでも遅れたら、タダじゃおかないんだから」

そう言い残して、お母様は出ていった。

「今日はまだ機嫌がいいほうだわ」

ため息をつく。

私——ヴェロニカは、ライナルト王国のエルヴァノート公爵家の娘として生を授かった。

お父様とお母様の夫婦仲は昔から冷え切っており、食卓を囲んでも視線を交わさず、会話も必要最低限だった。

そんな冷え切ったふたりの間に生まれた子が私だ。

当然、ふたりから大切にされることはなかった。まあ、そうだとわかったのは物心がついてからだったけど。

成長するにしたがって、両親の私に対する嫌悪はひどくなっていく。

その理由のひとつが私の容姿。

鏡に映る私は、人目を引く紫の髪をしていた。目元はくっきりとしていて、何もしくなくても化粧をしたみたいに強い印象になる。

黙っていても反抗しているように見られてしまう私の顔は、両親から『可愛げがない』『生意気だ』と切り捨てられた。

そうして私は幼い頃から使用人がやるような仕事をさせられるようになった。

エルヴァノートは公爵家にしては、使用人の数が少ない。私が朝から晩まで働いているから、それで事足りると思ったのだろう。

何度か改善を求めたことはある。

しかし、無駄なのだ。

少しでも反抗的な意思を見せれば、お母様は激怒し、お父様は軽蔑の眼差しを向けてきた。

屋敷に半ば閉じ込められるような形で家事をこなしていたが、十六歳になると学園に通うことになった。

この国の貴族は十六歳になると学園に通い、学問やマナーを学ぶ。私のことが大嫌いなお父様も世間体を気にして、学園に通わせることにしたのである。

学生の頃は屋敷の中にいるよりは気持ちが楽だった。しかし、去年卒業してしまい、唯一の安寧の時間がなくなった。

我が家が異常だということはさすがにわかっていたけど、諦めてしまった。

両親に反抗したところで、時間の無駄だから。

今日も朝から洗濯物と掃除をこなし、お母様に言われてからは急ピッチで洗い物を終わらせた。

「ふう、やっと終わったわ」

一息吐く。

時計を見ると、二時間ほどが経過していた。

もちろんこの間、休憩なんて一切ない。自分のカサカサになった手を見ていると、悲しくなってくる。

いつまで、こんな日が続くのかしら？

いつそのこと、この家から逃げ……

「いえ、バカなことを考えるのはやめましょう。私みたいな世間知らずの令嬢が市井^{しせい}に出ても、野^の

垂れ死ぬだけだろうから。次は庭の剪定を——」

「ヴェロニカ、ここにいたのか」

厨房を後にしようとする、ひとりの男性がやってきた。

銀髪のアールバック。鼻の下の髭はキレイに切り揃えられている。

この人こそ、エルヴァノート公爵——私のお父様だ。

普段は王都開発を担う重役としても働いている。表向きには真面目な貴族として名が通っていて、周囲の評判は悪くない。

「はい。洗い物を任されていましたので」

内心、面倒臭くて逃げ出したい衝動をこらえながら、私はうなづく。

「ふんっ、大方お前の要領が悪いから、こんな時間までかかったんだろう。私と血が繋がっているなら、もっとときばきやれ」

「おっしゃる通りです。すみません」

反論しても、お父様の怒りをさらに買うだけだ。それを長年の経験からわかっていた私は素直に頭を下げ、嵐が通り過ぎるのを待つ。

「……まあいい。そんなことより、お前に話がある」

「話ですか？」

「うむ。こんなところで話すのもなんだ、すぐに応接間に来なさい。そこで話そう」
そう言い残して、お父様は去っていった。

「話って何かしら？ 今までこんなこと、なかったのに……」

お父様はいつも私に命令するだけ。こうして呼び出されることはなかった。

「いけない、すぐに行かなくちゃ。少しでも遅れたら、お父様の機嫌を損ねるわ」

大したことじゃなかったらいいんだけど……

そう心配になったが、急いで応接間に向かった。

応接間に入ると、すでにお父様が怖い顔をしてソファに座っていた。

「そこに座れ」

「はい」

「お前に婚約の話がきている」

お父様が単刀直入に告げた。

「はい……？」

きよんとする。

それは、今までの私だったらありえない話だったから。

婚約……婚約……婚約……婚約……あれよね？

男女が結婚の約束をするという。

この先、一生この屋敷で生きていくのだと諦めていたので、そういう話がくるとは思っていなかった。

「こ、婚約ですか？　ですが、誰と……」

「この国の第一王子、ロードリック殿下だ」

ロードリック・ライナルト。

幼い頃から王位につくことを期待され、徹底した英才教育を叩き込まれてきたと聞く。

もっとも、あまり出来がよろしくなかったようで、彼を次期国王にと推す声は次第に小さくなったようにだけ。

この国の誰もが知っている話である。

それでも彼は第一王子。

王位継承権があることは変わらない。ならば、彼に嫁ぐ女性もふさわしい人物になるはずだ。それなのに……どうして、私が？

「先日、国王陛下が亡くなられた」

私の疑問を先読みするように、お父様が話し始める。

「突発性の病だったそうだ」

「突発性の病」

「そうだ。とはいえ、国王陛下の死は民の混乱を避けるため、まだ公にはおおやけされていない。現在は王族と大臣たちが国政を担っている」

初耳だった。

亡くなった国王陛下は結構なお年だけど、まだまだお元気だったと聞く。

それなのに急に亡くなるとは……突発性の病って怖いわね。

「だが、もちろんそれは一時的なものだ。すぐにでも次の国王を選定しなければならぬ。順当にいけば、第一王子のロードリック殿下だ。しかし、王城内では未だに第二王子を推す声も大きい」「なるほど」

「そこでまずは政治基盤を盤石にするため、持ち上がった話がエルヴァノート公爵家——つまり我が家の娘と婚約、そして結婚することだ」

我がエルヴァノート公爵家は、ほかの貴族たちとの結びつきが強い。

ゆえに第二王子派の反対を押し切るためにも、王族がエルヴァノート公爵家と婚姻を結ぼうとするのは自然な流れ。

「私たちの子どもは、お前ただひとり。お前は出来ない子どもではあるが、我が公爵家から王妃が出ることは、大変誉れあることだ。私はその提案を承諾した」

「その通りですね。ですが——」

「わかっていると思うが、お前に拒否権はない」

私の声を遮って、お父様が言い放つ。

「ロードリック殿下と婚約することになれば、王妃教育を受ける必要がある。殿下の王位を確定させるために、王家はすぐにでも殿下とお前を結婚させたいと言う」

「急な話ですね」

「ゆえにお前はこれから王城に住み込み、王妃教育を受けることになる。話は以上だ。さつさと荷

物をまとめ、王城に行け」

「……わかりました」

ロードリック様との婚約。

そこに、私の意思が介在する余地はない。

時に結婚の自由などないからこそ、貴族は平民よりも豊かな生活ができるのだ。もっとも、私は貴族らしい贅沢な暮らしなど一切したことがないけど。

だけど、私が公爵令嬢であることには違いない。貴族としての義務は果たそう。

一礼して、応接間から出る。

「今までひどい扱いをしてきて……今度はロードリック様と婚約か。お父様はとことん、私を道具として扱うのね」

もちろん、思うところは多々ある。

でも、どちらかというと期待のほうが大きかった。

この糞^{くそ}みたいな屋敷から脱出できる。

それだけでもうれしかったし、虐げられていた令嬢が王太子に見初められ、幸せを手にする――

そんな話は物語の世界ではよくあることだから。

少しくらいそんな夢を見ても罰^{ばち}は当たらないだろう。

「運が……向いてきたのかな？」

ロードリック様との幸せな結婚生活を想像すると胸が弾んだ。

支度を済ませ、すぐに王城に向かった。

煌^{きら}びやかな王城。

今まで遠巻きに眺めたことしかない。けれど、こうして間近で見ると迫力が違った。

白い石で築かれた城壁は陽光を反射して眩しく、尖塔^{せんとう}は空を突くように高い。高く掲げられた王家の旗が、風を受けて大きくはためいていた。

「今日からここに住むのよね」

未だに実感がなくて、ふわふわする。

王城に入り、使用人の案内で応接間へ向かう。

「来たか」

応接間に入ると、ひとりの男性が頬杖をつき、私に冷たい視線を向けた。

ロードリック様だ。

私は慌てて、彼の前でカーテシーをする。

「ロードリック様、初めまして。ヴェロニカ・エルヴァノートです。このたびは、ご婚約の話――」

「自己紹介などいらん。貴様にはまず、言っておくことがあるからな」

「言っておくこと？」

「僕が貴様を愛することはない」

「はい？」

一瞬、私は何を言われたのかわからなかった。

「貴様もわかつているだろう。今回の縁談は、僕が王位につくための政略的なものだ。僕だって、社交界に出ないサボリ癖がある令嬢を、本来なら妻に選びたくない」

サボリ癖があるって、どういうこと？

私が社交界にあまり顔を出さなかったのは、両親に止められていたから。お前のような可愛げのない女が社交界に出ても、恥をかくだけだ……と。

とはいえ、ここで下手に反論してしまつては、今回の縁談が白紙になるかもしれない。実家に戻されることだけはなんとしても避けたかった。

「わかりました。どうぞご自由になさってくださいませ」

だから、私は素直に答える。

無理に愛されようなんて思っていない。

私が我慢すればいいだけ。

だが、ロードリック様は返答が気に入らなかったのか、しかめ面がさらにひどくなる。

「つまらない女だな。僕は貴様を愛さないと云つてるんだぞ？ 涙くらい零したら、どうだ」

今まで会ったこともない人のために、涙なんか流せないんですが……

そんな言葉を引っ込める。

空気がひんやりと冷える中、ひとりの侍女が応接間に入ってきた。

「ロードリック様」

彼女は猫撫で声でロードリック様に近づき、彼の右腕に絡みつく。

「なっ……！」

その光景に、思わずぎよつとしてしまう。

彼女……侍女なのよね？

それなのに、第一王子であるロードリック様に馴れ馴れしい態度、あまりに不敬だわ。

「セリーナ」

しかし、ロードリック様は目つきを穏やかなものに変え、頬を緩ませる。

「どうしたんだい？ 今日はず定があるって言つたじゃないか」

「だって、退屈なんですもん。今日はあなたと、あまりしゃべっていませんし」

「そうだったのか。ほんと、君は可愛いな」

侍女の頭を撫でる、ロードリック様。

え、えーつと……私、何を見せられているのかしら？

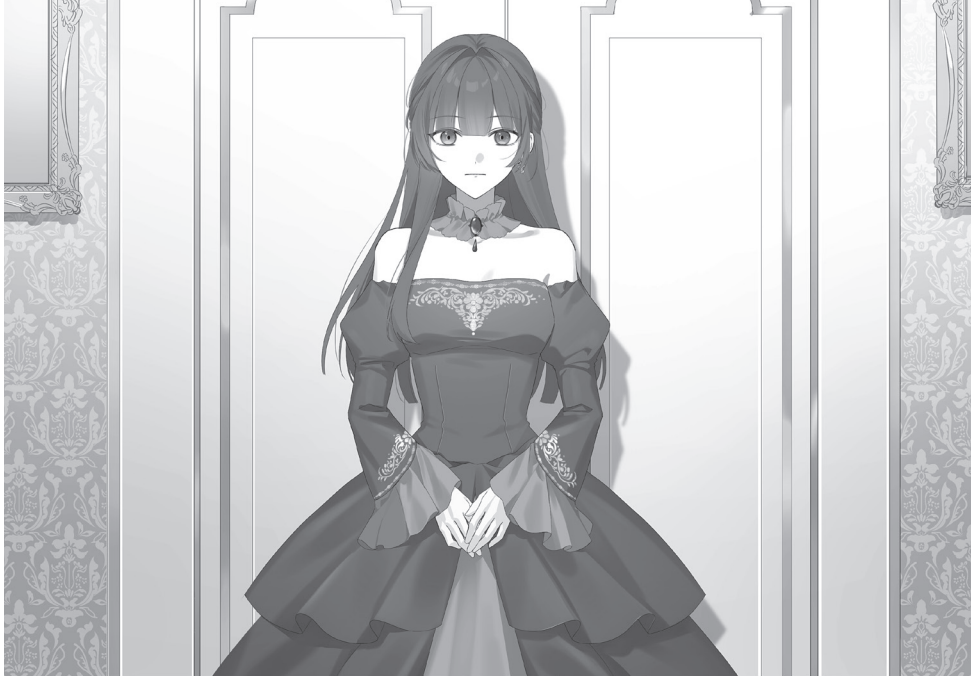
突然の光景に、口をあんぐりと開けることしかできなかった。

「あ、あの、ロードリック様。質問、よろしいですか？」

「ん……うつとうしいな。せつかく、セリーナが会いにきてくれているというのに。さつさと
言え」

今までの緩みきった顔が嘘のように、ロードリック様の顔が嫌悪に染まる。

「彼女は誰ですか？」



「この城の侍女のセリーナだ」

「セリーナです」

彼女——セリーナはロードリック様の右腕に絡みついたまま、私に会釈をする。

「ロードリック様、この人が例の婚約者ですか？」

「そうだ」

「ああ、やつぱり……」

その瞬間。

セリーナの目が怪しく光った気がした。

「初めまして。仲良くしてくださいね」。ロードリック様からお話がありましたが、政略結婚の相手だそうですね」

やけに『政略結婚』と強調された気がしたが……なんででしょうか？

いや、今はそんなことよりも。

「セリーナ、あなたは自分が侍女つてことを忘れていない？ 王子であるロードリック様にそのような不敬な態度、さすがに目に余るわ」

「え……」

当たり前のことを言っただけなのに、セリーナの表情がみるうちに悲しみに染まる。

「ひどい……どうして、そんなことを言うんですか？ わたしはただ、主であるロードリック様と仲良くしてるだけなのに……」



「そうだぞ、ヴェロニカ！身のほどをわきましろ！」

え……なんで私、怒られてるの？

わきまえていないのは、セリーナのほうなの？

「彼女は平民出身の侍女なんだ！そんな小難しい貴族のマナーを並べ立てても、彼女が困るだけだろう！」

「そうなんです……わたし、ただ一生懸命なだけで……」

「それなのにセリーナを軽んじるような言動、到底無視できない。貴様は彼女が平民だからと差別するつもりか？」

非難の声を私に浴びせるロードリック様。

セリーナはロードリック様の胸に顔を埋めて、しくしくと泣くが、涙が零れていないことはその横顔から明白だった。

「差別などしておりません。私はただ、平民出身だろうと、最低限の常識は知るべきだと思っただけです」

「常識を知らないのは貴様のほうだ！社交界に出ない、このサボり令嬢が！」

ダメだ……取りつく島もない。

到底納得はできなかったが、これ以上反論しないことにした。ここでロードリック様を怒らせても得はないし、私が大人になりましょう。

「……すみませんでした。以後、気をつけます」

謝罪すると、さっきまでの嘘泣きはどこにいったのか、セリーナはロードリック様から顔を離して、勝ち誇ったように言う。

「ふふふつ、ヴェロニカさん、いいですよ。許してあげます。これからよろしくお願いしますね」
そのセリーナの表情には優越感がありありと浮かんていた。

こうして、私の王城生活が始まった。

式は三ヶ月後に挙げるという。

それまでに私は、寝る間も惜しんで王妃教育に明け暮れた。

社交界の礼儀作法、舞踏会での立ち振る舞い、他国の情勢に王家の歴史。

覚えることは山ほどあり、少しでも間違えれば『公爵家の娘のくせに』と鼻で笑われる。

毎日、必死だった。

婚約者であるロードリック様とろくに話す機会を持てないくらい忙しかったが、このまま順調にいけば私は王妃になる。

最低限の務めくらいは果たさなければならぬ。

慣れないことで身体がぐたくたになったが、それでも実家で家事を押しつけられる日々よりは、ずつとマシだと自分に言い聞かせた。

それにロードリック様も今はセリーナに夢中だけど、私が頑張りを続ければ、いつかきつとわかってくれるはず。

負けたくない。ロードリック様に私の価値を認めさせたい。
その思いだけで必死に食らいついていた。

ある日、私はロードリック様に呼び出された。

「ロードリック様、ヴェロニカです。どうなさいましたか？」

もしかして、疲労困憊ひろうこんぱいの私に優しい声をかけてくれるのかしら？

内心そう期待していたが、彼の口から放たれた言葉は正反対のものだった。

「どうしたのだと？ 呼び出された理由がわからないのか？」

「心当たりがありません」

「まったく、そんなんだから貴様は……。聞いているぞ。貴様が性懲りもなく、セリーナを虐めて
いると」

「はい？」

唐突にそんなことを言われ、思わず私は聞き返す。

「どうして、そんな話に？」

「セリーナから聞いたんだ。僕とセリーナの仲に、貴様が嫉妬していると。先日彼女を呼び出して、叱責しししたらしいな」

冤罪えんざいだ。私はそんなことなどしていない。

それに仮に叱ったとしても、なんの問題があるのだろうか？

私はロードリック様の婚約者。

対して、セリーナは一介の侍女に過ぎない。

侍女のひとりがロードリック様に馴れ馴れしくしていたら、苦言を呈するのはおかしくない。

野放しにしているほうが、おかしくくらいだ。

「違います。私はそんなこと……」

「口答えるな！」

反論しようとする、ロードリック様は一喝する。

「か弱い侍女を虐めるなど、貴族の風上にも置けん！ これ以上セリーナを虐めるな！ わかった

ら、さつさとどこかに行け」

「……わかりました」

臍へそに落ちない気分を抱えながらも、ロードリック様の前から立ち去る。

部屋に向かう途中、ほかの侍女たちとすれ違ったが、彼女たちは私の顔を見てヒソヒソと話し、

笑っていた。

この出来事を皮切りに、侍女たちの私に対する態度が徐々におかしくなっていた。

「ヴェロニカ王妃、支度はご自分でなさいますよね？」

「私たちみたいな侍女に触れられるのも嫌でしょう？」

侍女たちが嘲笑しながら、私に言う。

さすがに腹は立ったが、ここで注意してまた変な噂が立つても困る。だから我慢して、何も言

返さなかった。

しかし、それからというもの、順調に進んでいた王妃教育が、事前に聞いていた時間と食い違ふようになり、遅刻扱いにされることが増えた。

もちろん、私は遅刻などしない。前日の夜には何度も予定を確認し、遅れないよう気をつけていた。

疑問に思い調べると、遅刻した際には必ずセリーナが絡んでいた。

「ねえ、セリーナ」

「なんですかあ？」

ある日、詳しく話を聞くために、セリーナを呼び出した。

「あなたから前に教えてもらった王妃教育の時間、間違っていたようだけど？」

「ヴェロニカさん！ ひどいです！」

言い終わらないうちに、セリーナは目に涙を浮かべて、悲痛な口調で言う。

「わたしがヴェロニカさんに、わざと間違った時間を伝えていると言っているんですか!？」

「はあ？ そんなこと言っていないじゃない。私はただ……」

「ひどいです……わたし、こんなに頑張ってるのに。やっぱり、ヴェロニカさんはわたしを見下してるんですね。平民だからバカだと思ってるんだ！」

「どうしたんだ」

啞然としていると、タイミングよくロードリック様が現れた。

「セリーナ、どうして泣いているんだい？ まさかヴェロニカに……」

「聞いてください！ 最近、ヴェロニカさんが王妃教育によく遅刻するのは、全部わたしのせいだと言ってるんです！」

「なに!？」

ロードリック様の顔が、みるみるうちに怒りで赤く染まる。

「ヴェロニカ！ 貴様は、自分の失態をセリーナの責任にするつもりなのか！」

「ロードリック様、違います。私はただ——」

「口答えるな！ 王妃教育に遅刻するのは、貴様の怠慢^{たいまん}だろう！ それなのにセリーナに責任を押しつけて……貴様はどこまでセリーナを虐めれば気が済むんだ！」

セリーナを胸元に抱き寄せ、ロードリック様が私を叱責する。

——ロードリック様は私を守ってくれない。

ふたりの姿はまるで、お姫様とそれを守る正義の騎士のようだ。

ロードリック様の婚約者でありながら、私はふたりの世界に割って入れない。

「……申し訳ございませんでした」

悔しい気持ちをこらえながら、頭を下げる。

そう、私が我慢すればいいだけのこと。

セリーナもたまたま調子が悪かっただけかもしれない。

嫌なことがあっても我慢すれば、ロードリック様はいつか私を認めてくれるはず。こんなところ

で挫けるわけにはいかない。

だが、状況はひどくなっていくばかり。

いつしか、私は城内でもサボリ令嬢と呼ばれるようになった。

ロードリックと婚約して三ヶ月、無事に彼との結婚が成立した。

それと同時に、ロードリック様が王位についた。

これで私は晴れて王妃になったわけである。

だが、私はこれっぽっちもうれしくなかった。

所詮、私はお飾りの王妃。

城内でも立場が悪く、肩身が狭い思いをしているのだから。

そして初夜を迎えた一週間後、王城で舞踏会が開かれた。

この城では一ヶ月に一度、このような舞踏会が開かれる。この日は王都にいる有力な貴族が集まり、思い思いに舞踏会を楽しむ。

私も王城に住むようになってから何度か出席したことがあったが、いつも居心地が悪い思いを強いられていた。

「はあ……今日もロードリック様はセリーナとべったりか」

壁際でふたりの様子を眺める。

セリーナはまるで自分が王妃だとも言うように、ロードリック様と楽しそうに踊っていた。

ロードリック様もご満悦である。

頭に虫でも湧いてんのかしら？

参加者の何人かはロードリック様たちに目を細めているが、あのふたりは気づかないのだろう。

ほとほと呆れていると、赤ワインの入ったグラスを手にした令嬢が近づいてきた。

「あら、ヴェロニカ様じゃないですか」

「ノーラ」

彼女はノーラ・ゴルディア。

ゴルディア伯爵家の令嬢で、私の学園時代の同級生でもある。

銀色の髪をゆるく巻き、宝石の飾りが付いた髪留めで艶やかにまとめている。

首元には大粒の宝石が並ぶネックレス。耳元にも同じような意匠のイヤリングが揺れ、見るからにお金がかかっていそうな外見だ。

ゴルディア伯爵家は、商売によって財を成した一族。悪どい商売もやっていると黒い噂が聞こえているが、一度たりとも摘発されていない。

その影響力は貴族社会でもすさまじく、誰もが彼女たちの言葉を無視できないほど。

とはいえ、私とノーラでは『公爵令嬢』と『伯爵令嬢』という身分の差がある。

それに学園時代から、自分を着飾ることに夢中で成績も下位だった彼女とは違い、私はいつも成績上位に名を連ねていた。

ノーラはそれらが気に入らなかったのだろう。

そのころから、彼女は表では私のことを『親友』と言うのだけど、裏で私の陰口を叩いたり陰湿な嫌がらせをしたりしていたことを知っている。

卒業して以来、彼女とは会っていない——というか会いたくもなかったので、こうして顔を合わせるのは久しぶりだ。

「失礼。今は王妃様、でしたわね。ですが、みじめですわねえ。ロードリック様はセリーナさんと楽しそうに踊っていますもの」

ワインを持っていないほうの手で口を押さえ、くすくすと笑うノーラ。

「あなた、セリーナのことを知ってるの？」

「当然ですわ。貴族社会でも話題になっていますわよ。ロードリック様はヴェロニカ王妃ではなく、一介の侍女にご執心だと」

そんなところまで噂になっているなんて……つくづく、ロードリック様の脇の甘さには呆れる。

「そういえば、あなたに関する噂も聞きましたわ」

「噂？」

「ええ、ひどいサボリ癖のある令嬢だと。王妃教育にもよく遅刻しているそうですわね」

「誤解よ。あれには行き違いがあつて——」

「まあ、あなたもお忙しいですね。ついつい王妃教育をサボりたくなる気持ちは、わかりますわ」

私の言い分をまともに聞かず、ノーラは勝手に話を進める。

「ですが、それではロードリック様にご負担をかけてしまうのでは？」

「そうかもしれないわね。でも、私は自分のやるべきことを粛々とやるだけよ」

毅然と対応する。

ここでノーラと言いつ争つても疲れるだけだから。そのことは学園時代からよく学んでいた。

しかし、彼女はそんな私の態度が気に入らなかったらしい。

「……よくもまあ、サボリ令嬢が私にそんな口を利けますわね。あなたなんか——」

ノーラが右手を上げる。

「こうしてやりますわ！」

「えっ」

そのまま私を勢いよく押した。

咄嗟のことだったので反応が遅れて、お尻から転倒してしまった。

「あら？ ヴェロニカ様、いけませんわ。ずいぶんと酔っていらつしやるのね。はしたないですわ。おーほっほっほ！」

ノーラの高い笑い声が会場に響き渡る。

しまった……まさかこんな、あからさまなことをしてくると思わなかったから、油断していたわ。

誰も私のことを気遣わない。

それどころか、周りは『またあのサボリ令嬢が粗相をしているよ』とでも言いたげな視線を向け

てくる。

「では、私は行きますわ。私もいろいろと忙しいので」

私をバカにするような台詞を吐いて、ノーラはさつと立ち去ってしまう。

悔しい……何も言い返せなかった自分が。

でも、あまり騒いではロードリック様に迷惑をかけてしまう。悔しさとみじめさをこらえ、ひとりで立ち上がろうとしたときだった。

「——大丈夫か？」

目の前に手を差し出される。

視線を上げると、見目麗しい男性が心配そうにこちらを見ていた。

「あなたは……」

黒曜石のように艶のある髪。

舞踏会用の上品な服を着こなし、立ち姿には凛とした気配があった。

背は高く、無駄がない体つき。

厚みを誇示するような筋肉ではないが、薄い布越しでも胸元や腕の輪郭を見れば、日頃から鍛えていることがはつきりと伝わってくる。

鋭い目はロードリック様に似ている気がしたが、少し違う。

ロードリック様の視線が傲慢さと冷たさを孕んでいるとしたら、この人の瞳の奥からは真つ直ぐで、どこか少年めいた無邪気さを感じた。

「すまない。俺も会場に着いたばかりだったんだ。あの令嬢が君を押し倒そうとした場面を見たが、助けに入るのが遅れてしまった」

男性はそう言いながら、私を優しく立ち上がらせてくれる。

「あ、ありがとうございます。……もしかして、あなたはジェラルド様ですね」

私の間に、彼——ジェラルド様は静かに首を縦に振った。

やっぱり、ジェラルド・ライナルト様だ。

第二王子でありながら、精鋭揃いの第一騎士団の団長を任されている人。

彼が率いる第一騎士団は、基本的に帝国との国境を守る基地に滞在している。そのため、滅多に王都に戻ってくることはない。

忙しいせいなのか、彼は今まで婚約者がいたことがなく、本人も作る気がなさそうだとも聞いたことがあった。

写真という数年前に王都で開発された記録技術で見たことがあったが、こうして彼と直接顔を合わせるのは初めてだ。

「どうして、あなたがここに？」

「俺が舞踏会にいるのは変か？」

「まあ正直……」

実際、ジェラルド様が今日の舞踏会に出席することは、事前に聞いていなかった。今日だけではない。

今まで一度たりともだ。

もっとも、私は王妃とはいえ、城の皆から疎^{うと}まれていたので教えてもらえなかっただけかもしれないが。

「だろ。何もない、こんな場に顔を出すことはなかった。少し前に王都に戻ってきたが、このことは兄のロードリックにも伝えていない」

「何もなければ……？ 何かほかにご予定があつたんですか？」

「こちらの話だ。そんなことより、君は……もしかしたら、王妃のヴェロニカか？」

「はい」

首を縦に振ると、ジェラルド様の表情が一瞬で引き締まった。

「やはりか。人目を引く紫の髪に、気品のある顔つき。聞いていた通りだ。こうして顔を合わせるのは初めてだな」

「そうですね。お会いできて光栄です」

「俺もだ。となると、さっきの女は王妃に無礼を働いたことになる。あいつはどこの出の令嬢だ？ 王妃を押し倒すなど、重罪だぞ」

ジェラルド様の顔に怒りが滲^{にじ}む。

「君は知っているか？」

「はい。ですが、今はそつとしておいていただけると幸いです」

「なぜだ？」

「だって、せっかくの楽しい舞踏会ですもの。少し小突かれたくらいで目くじらを立てていたら、キリがないですわ」

嘘だ。本当はノーラにぎゃふんと言わせたい。だが、私はそれをぐつと我慢する。

「だが……」

「いいんです。私はなんとも思っていないから」

「……そうか。君がそう言うなら、あの女は不問としよう。君は優しい女性なんだな」

ふんわりと柔らかく微笑むジェラルド様。

笑うと、意外と可愛い顔立ちをしているんだなとふと思った。

だが一転、ジェラルド様はしかめ面で、ロードリック様たちのほうを見る。

「それにしても……どうしてロードリックは王妃をさし置いて、あのピンク髪の変な女と踊っている？ あいつは何を考えているんだ」

「私とロードリック様は政略結婚ですから。このような場で私と踊るのも嫌なんですよ」

「たとえ政略結婚だとしても、妻を蔑^{なげ}ろにしている理由にはならん。それなら、そうだな……」

少し考え、ジェラルド様は私を真っ直ぐ見つめる。

「俺と踊らないか？」

「ジェ、ジェラルド様とですか？」

「ああ」

ジェラルド様がうなずく。

「でも……」

「ロードリックのことを気にしているのか？　ならばかまわない。不義理を働いたのはあちらのほうが先だ。王妃ともあろう者が壁の花になっているほうが、体面が悪い」
頑なに自分の意見を譲ろうとしないジェラルド様。

……ここまで言われたら、断るのも失礼ね。

「でしたら、お願いします。ダンスは苦手なので、ご迷惑をかけるかもしれませんが」

「任せておけ。君は俺に体を委ねればいい。サポートしよう」

さっとジェラルド様が手を差し出す。

迷いなく、私は彼の手を取った。

ダンスが始まる。音楽に乗って、ステップを踏んでいく。

王妃教育でダンスの練習はしていたが、このような場での実践は初めてだったので、何度か転びそうになった。

「ごめんなさい。やっぱり、あなたに負担をかけてしまっていますね」

「そんなことは気にするなと言った。君はただ、ダンスを楽しめばいい」

踊りながら、微笑むジェラルド様。

彼の気遣いに感謝し、落ち込みそうな気持ちを無理やり前に向かせた。

ダンスが佳境に入る。

ジェラルド様の献身的なサポートもあって、ようやく緊張も解けてくる。ミスをしてはいけな

い……という思いも忘れ、いつの間にか自然に楽しんでた。

周囲の視線が私たちに集まるのを感じる。

煌びやかなダンスホール。今みんなの視線を釘付けにしているのは私たちだ。なぜだか、そう感じた。

やがて音楽が一区切りし、私はジェラルド様から手を離す。

「ありがとうございます。とても楽しかったです」

「それは俺もだ。ダンスに興じるなど久しぶりだったが、時間を忘れることができたよ。ありがとう」

ここでも、彼は優しい声をかけてくれる。

その後、舞踏会の時間が終わるまで、ジェラルド様は私に寄り添ってくれた。

もっとも、彼は何かを気にするようにしきりに辺りをキョロキョロしていたが、理由はわからない。

この出来事は辛いことばかりの私の王城生活において、忘れられない一幕になった。

あれから、さらに半年ほどが経った。

この半年間、王妃になったということで、私は公務もやる必要が出てきた。

しかもロードリック様が何かにつけて公務をサポートするため、必然的に私が彼の分もしないといけないくなった。

しかし、私がサボり令嬢だという評判はさらに広がっていく。

重要な会議の時間を間違つて伝えられたり、城の者が皆、私の言うことを聞かず、公務が思うように進まなかったりしたから。

私のせいじゃないのね。

みんな、私を舐めてるんだろう。

それでも我慢して、王妃としての責務をこなそうと必死に頑張った。

そんな日々の中、王城で建国記念パーティーが開かれることになった。

一年に一度、ライナルト王国の建国記念日に行われるパーティーだ。城内はいつもの舞踏会よりも華やかに飾り立てられ、一段と賑わうのだという。

もちろん、私も王妃として建国記念パーティーに出席することになった。

「ふう……」

ここでも私は壁の花だ。

ロードリック様はパーティーが始まって以降、なぜか姿が見えない。

ジェラルド様も三ヶ月前の舞踏会が終わった後、すぐに国境沿いの基地に戻られて、それから一度も姿を見たことがなかった。

「こういうのにも、いい加減慣れたわね」

誰にも聞こえないように呟く。

城内で孤立していることに変わりはない。

しかし、どんなひどい環境でも日にちが経てば慣れるものだ。

私はこの先、一生同じような日々を送ることになるのだろう。

そのことに悲しさはあったが、怖くはない。私の人生はこんなものだとか心のどこかで諦めているから。

「このつまらないパーティー、早く終わらないかしら」

煌めく会場を眺めていると——そのときは訪れた。

ザッ——ザッ——ザッ。

周囲の空気が一変する。

足音のほうに顔を向けると、ロードリック様が何人かの近衛騎士を引き連れ会場に現れた。

彼のそばにはセリーナの姿もある。

「え……？」

周りも困惑しているようだった。

ロードリック様たちはそのまま会場を進み、私の前で足を止めた。

「どうなさったのですか？ 私に何か……」

「ヴェロニカ——僕は君と離縁し、セリーナとの結婚を宣言する！」

静けさが広がったダンスホールに、ロードリック様の声が突如響き渡る。

「君は貴族でありながら、平民を見下している。身分の差など、くだらないものだ。恥を知れ！」

「ヴェロニカさん……ずっと、わたしの悪口をみんなに言ってますよね？ わたし、知ってるんで

すから。それに自分のミスを棚に上げて、わたしを罵倒して……」

セリーナはロードリック様の胸に顔を埋めて、しくしくと泣き真似をする。

「ま、待つてください。私は平民を見下したりなどしていません。それにセリーナと結婚するなんて……」

「黙れ！」

私を一喝するロードリック様。

彼は私の話を聞かない。いつものことだ。

周囲のざわめきが広がっていく。

質問する間も与えられないまま、ロードリック様は一方的にまくし立てる。

「不出来な君よりも、心優しいセリーナのほうが何倍も優れている！ だから僕はセリーナと結婚するんだ！ それに……君にはある嫌疑がかかっている」

「嫌疑？」

「ヴェロニカが敵国——オルディア帝国のスパイで、我が国に不利益になる情報を流し続けているという疑いだ！」

はあ？ 何それ。

無論、私はそんなことをしていない。

そもそも毎日の公務で忙しいのに、そんなことをしている暇などないと、ロードリック様が一番知っているはずだ。

「違います！ 私はそのようなことをやっていません！」

「ええい！ まだ言い逃れをするのか。ならば、これを見よ！」

ロードリック様が近衛騎士から紙の束を受け取り、それを私の前に突きつける。

私は震える手でそれを掴み、内容に目を通す。

「何これ……」

そこには私が帝国の使者と密会している時間や場所、さらには帝国との通信文書も添付されていた。

違う……私はこんなことをしていない。

「おい……帝国のスパイだってよ」

「おかしいと思ってたんだよ。いくらなんでも不出来だと思っていたが、帝国のスパイだと聞かされたら納得だ。わざとサボって、国益を損ねていたんだろう」

「見てみるよ、あの怖い顔。何かを企んでいるような顔だぜ」

周囲がヒソヒソと話す。

誰も私のことを信じてくれない。

反論する間もなく、すでに会場には『ヴェロニカはオルディア帝国のスパイだった』という空気が形成されていた。

「処罰は厳しいものとなるから、覚悟するんだな。おい……ヴェロニカを拘束しろ」

ロードリック様が近衛騎士に命じる。

女の私が屈強な近衛騎士を振り払えるわけがない。あつという間に拘束されて、会場の外に連れ出される。

「ロードリック様！ これは何かの間違いです！ 私は神に誓って、帝国のスパイではありませんん！」

必死に訴えるが、ロードリック様は私を一瞥もせず、背を向けた。

帝国のスパイとして囚われた私は、刑が確定するまで、王城地下の牢屋に閉じ込められることになった。

牢屋生活は地獄だった。

下は固い地面。トイレも簡素なもので屈辱的だったし、一日に一度だけ出る食事は薄いスープとパンだった。

ここに入れられてから一ヶ月が経過したと思うが、日時が曖昧でよくわからなかった。

だけど、私は信じていた。

未だにお父様は一度も面会に来てくれないが、きっと娘である私の冤罪を晴らすために走り回っているのだろう。

ロードリック様も建国記念パーティーでは冷静じゃなかっただけで、最後には私を信じて、ここから出してくれるはずだ。

そう期待して……

「ヴェロニカ」

寒さで意識が朦朧とする中、顔を上げると、ロードリック様が私の牢屋の前に立っていた。

一瞬うれしさで顔が綻びそうになるが、彼の私を見る目は鳥肌が立つくらいに冷たかった。

「貴様に伝えることがふたつある」

伝えること？

もしかして、私への疑いが晴れたんじゃないか――

だが、次に彼が放った言葉は、私を絶望の底へ突き落とすものだった。

「まず、僕とセリーナの結婚式の日取りが決まった。貴様のときとは違い、結婚式当日は国を挙げての盛大な式となる」

――ああ。

一瞬、地面がなくなっただかのような感覚に陥る。

彼は私と離縁し、セリーナと一緒にになる。

ロードリック様はいつか振り向いてくれると思って、今まで必死に食らいついてきた。辛い生活の中でも、何度も自分にそう言い聞かせた。

しかし、無駄だったのだ。

「そ、んな……」

今までの努力がすべて水泡に帰し、うなだれる。

「そしてもうひとつ」

絶望に沈む私に追い討ちをかけるように、ロードリック様は言う。

「君の処刑執行日が明日に決定した」

「しよ、処刑……？ どうしてですか！」

思わず、声を荒らげてしまう。

「私が帝国のスパイだなんて嘘です！ どうして信じてくだらないのですか!？」

「ああ……そうだろうな。貴様は帝国のスパイではない」

え……？

貴様は帝国のスパイではない？

その通りだが、それならどうしてロードリック様は私をこんなところに……

「冥土^{めいど}の土座に聞かせてやる。君は先代国王陛下は突発性の病で亡くなったと聞いているな？」

「はい」

「だが、それは違う。先代は……僕が暗殺を指示したんだ！」

暗殺――

意味としてはわかるが、まさか自分の周りで起こると思わなかったので、咄嗟に二の句が継げなかった。

「な、なぜ……」

それでも、声を絞り出すように問いを発する。

どうして、先代は殺されなければならなかったのか。

わからなかった。

「僕が王座につくには、先代が邪魔だったからだ。だから殺した」

だが、実の父の暗殺という大それたことをやってのけたロードリック様が放った答えは、意外なほどあっさりしていた。

「そんな理由で……？」

「そんな理由？ 大事なことだろう。なぜなら王座につけば、今よりももっと絶大な権力を得られるのだからな！」

両腕を勢よく広げるロードリック様。

「そして君と結婚することにより、僕は予定通り王位についた。だが、この国では側妃は認められず、その制度を変えるのは不可能だった。だから僕は貴様にスパイの疑いをかけて、排除することにした。くくく……こまでうまくいくとはな。我ながら自分の手腕に惚れ惚れするよ」

耳の奥できいんと嫌な音がした。

そんなくだらない理由で先代は殺され、そして今度は私が殺されようとしている。

「そ、そんなのって……」

震える自分の両手を見つめる。

――私の人生はなんだったんだろうか。

両親からは愛されず、召使いのように扱われ、それが終わったと思ったら今度はロードリック様と婚約させられた。

城内での生活も決して楽じゃなかった。

ロードリック様はセリーナを大切にし、私に見向きもしない。

毎日、王妃教育や公務を頑張った。

愛されないとわかっていても、嫌悪で顔を歪めるロードリック様に抱かれた。

それも王妃としての責務を果たすため。

そうすれば、いつかロードリック様はセリーナじゃなくて、私の手を取ってくれるはず。そう期待していたから。

「それなのに、こんな結末って……」

——あんまりじゃない！

今までなんのために頑張ってきたというの！

私はみんなに利用されるために生まれてきたっていうの！

「くくく……いい表情だな。醜^{みにく}すぎて、初めて貴様を美しいとすら思うよ」

ロードリック様が邪悪に唇を歪める。

「貴様が今、下々の者の間でなんと言われているか、知っているか？ 『傾国の悪女』だ！ すべて僕の計算通りだ！ 貴様が悪女であつたほうが、誰も冤罪である可能性を疑わない！ エルヴァノート公爵も君を切り捨てた！ 僕のために、愚かな悪女でいてくれてありがとう！」

「許さない……」

自分の口から出たとは思えないくらい、低い声が出た。

立ち上がり、鉄格子を両手で握りしめる。

鉄格子を乱暴に揺さぶり、喉が張り裂けんばかりに叫ぶ。

「許さない……！ 私の人生をなんだと思ってるの!? 私の人生を返して！」

「おお、怖い怖い。まるで獣みたいだ。気に入らないなら、処刑台でみんなに訴えたらどうだ？ もつとも、傾国の悪女である君の言葉なんか、誰も耳を傾けないがな」

そう言って、ロードリック様は私に背を向ける。

「じゃあ、あと一日の命、とくと堪能するんだな」

「待ちなさい！ 絶対にこの報い、受けさせてあげるわ！」

「期待してるよ」

鉄格子の隙間から腕を伸ばしてロードリック様を掴もうとするが、彼はそれをかわし立ち去ってしまった。

「……くそっ！」

壁に強く拳を叩きつける。

「何が間違っていたの？」

ロードリック様との婚約を承諾したこと？

いや、王命を断れるはずがない。ならばロードリック様の婚約者になってから、私にできることはなかったのだろうか。

いくら後悔しても、もう一度人生をやり直すことなどできるはずがない。

だけど、もし神様がやり直す機会を与えてくれるなら、今度こそうまくやってみせる。

「いや……それだけじゃ気が済まない」

私の純潔を奪ったのに『貴様を抱くなど、吐き気がする』と言い放ち、私を都合のいい駒としか
見なかったロードリッック様。

嘘をつき、私を貶めた侍女のセリーナ。

彼との婚約話を持ってきた、お父様。

私を軽んじた貴族や城の使用人も。

そいつらに復讐してやる。

そして夜が明け——予定通り、傾国の悪女である私の処刑が行われたのであった。



「は、ははは……そうだ。だから、私は殺されたんだった」

そして、なぜかロードリッック様との初夜の日にまで時が巻き戻っていた。

乾いた笑いが口から出る。

「殺された？ 君はさつきから、なにを言ってるんだ」

ロードリッック様は私を怪訝そうに見る。

……いえ、もう『様』を付ける必要はないわね。これからはせめて心の中だけでも、ロードリッ

クと呼び捨てにしましょう。

「つかぬことを伺いますが、今日は王国暦何年のいつですか？」

「ん？ なにを言っている。今日は——」

ロードリッックの口から、今日の日にちが告げられる。

うん……やっぱり、当たっている。ロードリッックに純潔を捧げたこの日を忘れたことはなかった
から。

これまでの出来事が夢だったとは思えない。

夢にしては現実味がありすぎたし、処刑を告げられた際の絶望と悔しさは、今もなお私の胸に深
く刻まれている。

「さつきから変なやつだな。もういい。僕は行く」

私を不気味がり、ロードリッックは逃げるように部屋から出ていった。

「ふふふ、どうしてあんな男に今まで従っていたのかしら」

服を着ながら、状況を整理する。

このままではオルディア帝国のスパイという疑いをかけられ、私は処刑される。

その理由はロードリッックが私を陥れ、セリーナと結婚したかったから。

「もつとも、彼の言葉が真実であるとは限らないけどね」

それにただ私が邪魔なだけだったら、わざわざありもしない罪を捏造するより、もっと手間のか
からない方法があったはずだ。